ポケモンTHEクロニクル

シヴィス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンＴＨＥクロニクル

【Ｎコード】

Ｎ５９４０Ｙ

【作者名】

シヴィス

【あらすじ】

突如現れた異形の存在、悪魔……。　　悪魔から世界を守るため、デッドバスターとなったポケモン達が立ち向かう！！

?：始マリノ刻

この世界には、二つの種族が存在する。

一つは、ポケットモンスター。彼等は、自らを魔獣と称したりする。地下都市アンダーワールドで暮らし、もうひとつの種族から身を守っている。

その種族が、悪魔と呼ばれる異形の存在。ポケモンを喰い、無限に成長し続ける魔物だ。
マザーコアと呼ばれる母体がいるらしいが、何処にいるかわからない。

この物語は、デッドバスターと呼ばれるポケモン達の記録（クロニクル）。

セイコク
――　成國　二〇二七年

地下都市、アンダーワールド。悪魔から身を隠して暮らす、ありとあらゆるポケモン達が住む世界。
東西南北の地区があり、ポケモン達はパレットと呼ばれる家で生活をしている。破れた衣と棒で作ったテント、石を積み上げて作ったモノ……。種類は様々。
全部で四つの地区は、四のブースに区切られている。かつて、外界にあった国と同じ数十七になるように。統治者である王の元、平和が保たれている。そんなアンダーワールドには、秘密組織と言うべき存在が……。

――西地区　第四ブース

「……。」

右腕に包帯を巻いた漆黒のポケモン……ダークライ。彼はここの王で、闇の国という場所を納めていた。誰よりも純粋で優しい心を持ち、各国からも指示を得ている存在。
高台にいる彼が見つめる先には、十七人のポケモン。地面に座り、頭に機械ヘルメットを付けて眠っている。

彼等はデッドバスターと呼ばれている、特別な存在。悪魔の血を取り込み、悪魔ポケモンと化した……悲劇の戦士。世界を悪魔から守る為、自らこの道を選んだ者達だ。

「イメージトレーニング終了！！全員ヘルメットを外せ！！」

ダークライの号令で、戦士達は一斉に目覚める。

「次は武器のメンテナンスだな……。呼び出された順番に、ラルク博士の研究所へ。」

「「はい！！」」

デッドバスターについて、少しお話ししましょう。
デッドバスターになるには、悪魔の血を受け入れる……つまりは、適合者でなければならない。ただ思いが強いだけでは駄目なのだ。
悪魔化すると、ポケモンの力と悪魔の力が合わさり更に強力な技を身につけることができる。そんなポケモン達が、デッドバスターとして活躍するのだ。
デッドバスターになると、体内に寄生兵器を宿すことになる。予め武器のオーダーを取るから、戦士達は安心して体を預けられる。その相手が……。

「いらっしゃ～ァい♪三ヶ月に一回のメンテナンスよ～ん♪」

「相変わらず……ですね。ラルク博士。」

ランクルスのラルク博士。会話をしている戦士は、ゾロアーク。
悪魔化している為、本来赤い部分が黒銀に染まっていた。鬣は、磨いた鉄のように美しく輝いている。

「ささ！座って座って♪」

「はい。」

「えっと～……。カルマくんだね？武器はクリスタルの鎌。」

パソコンを片手に、ラルク博士はカルマと面談。武器の調子や、悪魔と戦っている最中に不具合がなかったか、破損はしたか等々。メンテナンスに必要な情報を集めていく。

「あ、お兄さん元気？弟くんは？三人兄弟なんだよねぇ♪」

「博士、脱線してる場合ですか？」

「おっと！ついつい……。さて、とくに異常は無いみたいだから…バックアップだけにしようか。君はいつも無茶をするらしいからね。誰かさんみたいに。」

付き添いで来ているダークライをチラ見し、ラルク博士は準備にかかる。当のダークライはというと、苦笑いするしかなかった。

「みんなが終わり次第、貴方もメンテナンスね？ガイア黒王（こくおう）。」

「わかっている。」

机にパソコンを置き、ラルク博士は後ろのメインコンピュータに向かう。ガチャガチャと何かを探し始めた。

「あった。」

「……痛いんだよな。それ。」

「ガマンガマン！」

コンセント……に似た頭が付いてるコードを引っ張って来て、カルマの腕に突き刺した。その瞬間、カルマの体に激痛が走る。ほんの一瞬の出来事は過ぎ去り、息を切らしぐったりと椅子にもたれる。

「い…てぇ……。」

「あーやっぱり。ちょっとガタが来てるねぇ。治しとくよ♪」

「え、あ……はい。」

「痛いからって駄目だよ〜？嘘ついちゃ！」

「すみません。……イだッ！！いデデデデデデッ！！」

胸を押さえてジタバタもがくカルマ。ダークライのガイアは、見て呆れていた。
本来ならこうはならないが、扱いが雑だとカルマのようになる。死にはしない。

「他の子は痛がらないんだよ？無茶苦茶な使い方、してるんじゃないの？」

「博士、それルークにも言ってやって下さ……イッタァ！！」

「やれやれ。……はいおしまい！次はオズくんだね。」

「余はもう来ているのだ。」

一同振り向き、入り口の前に立つ声の主を見つめる。そのポケモンはデスカーン。デスカーンはカルマを見て、笑みを浮かべた。

「やぁカルマ。ずいぶんと叫んでいたが、大丈夫か？」

「な……なんとかな。今、一人称とか喋り方…違ってなかったか？」

「ん？聞き間違いじゃないかな……。俺はいつも通りだぞ。」

「そうか……。じゃあ博士、また。」

「お大事に～♪」

プラグは抜かれ、カルマは研究所を後にする。

カルマが去ったのをいいことに、デスカーンのオズは口調を戻した。
ふぅ……。と一息つき、オズは二人と会話する。

「さて……。前から話したかった回想だがな。唯一の王適合者は、余とガイア殿だ。不適合者になってしまった王や民は……。」

「技も特性も失ってしまった。だよね？」

ラルク博士の発言に、オズとガイアは頷く。
不適合者とは、悪魔化せず、技も特性も失ってしまった者達のこと。悪魔の持つ治癒力はあるため、武器を手に外界で悪魔を研究している。スラムという集落で、自給自足の集団生活。集落にはリーダーが二人いて、階級が上のリーダーが全ての指揮を取る。もう一人のリーダーは、補助をする為にいるようなものだ。
ここからデッドバスターの基地に向けて、悪魔の出現や研究結果が届けられるのだ。

「今まではやたらめったにしていたからな……。望んで来てくれた者達には、詫びねばならない。」

「今はディアルガとレシラムが協力してくれている……。不適合者を出さずに此処まで来たのは、余は、彼等のおかげだと思っている。」

「嗚呼。そうだな。にしてもお前、民に化けて活動をするとは考えたな……。私には真似できないぞ？」

「民のダークライはいないからな。デスカーンには民の者もおる……。王だと隠すには打ってつけじゃ。」

強く鉄の扉を叩く音がし、一同は扉へ目を向ける。オズは慌てて椅子へ腰掛けた。というか……立っている。扉を開けて現れたのは、ガイアの部下であるヨノワールだった。

「どうした？またアイツ等か？」

「は……はいッ！！ズルズキン四人組が、脱走しましたッ！！」

――西地区　エディミィ

エディミィという町を走る、ズルズキンの四人。悪魔化しているのは、内三人だけ。メンバーを紹介しましょう。
先頭にいる、黒いタンクトップにズボンの皮、悪魔の目をしたズルズキン。『ルーク』。最近は黒い手袋を履いている。
後ろで彼の尻尾を持って走ってるのは、不適合者なのにデッドバスターをしている双子の弟。『エール』。白いパーカーがトレードマークだ。

傷付き失明した開かずの左目、胸にザラ紙を巻いた普通の色違い。『シスカ』。
完全に悪魔化しているズルズキン。『イヴィル』。
その姿だが……ズルズキンの原型をとどめていない。鶏冠じゃなくて赤い鬣、肌は濃紺。五本指を折らないと地面に付いてしまう、長い腕。首と手首には白くふさふさの毛…。悪魔だから皮は着ていない。
以上。ズルズキン男子四人組の紹介でした。

「メンテナンスなんてしゃらくせぇッ！！野郎共ーッ！！脱走だ走れーー！！」

感情のままに進むルークを見て、はいはいとシスカは笑う。

「エール疲れた。ルークぅー。」

「よしきたッ！！」

立ち止まり、ルークはお姫様抱っこでエールを運ぶ。

「チョッと待テ。ドコまデ走ル気だ？」

奇怪な声でイヴィルが喋る。彼の言葉は、今いる三人にしか理解できない。理由は、またいずれ。

「とりあえず逃げる！！」

「……ヤレヤレ。」

「行くよ、イヴィル。」

走り去るルークを追うシスカとイヴィル。その頃ガイアは、高台からエディミィの町を見つめていた。

右手を町へ向け、目を瞑る。闇を見つめるガイアの目には、無数の白い光が映っていた。ガイアが見ているのは、ポケモン達の魂。これは、彼にしかない特集能力。手をかざしている範囲内の魂を見ることができ、悪魔とポケモンの識別も可能だ。なぜなら、悪魔の場合魂は赤いからだ。

「いたいた……。サクラ、頼む。エディミィ大橋の入り口付近だ。」

「はい。黒王様。」

女性のサーナイトは指示通りに超能力を使う。四人組を此方へ引っ張り込むのだ。
十分もしないで、四人組は元の場所へ。ルークは胡座をかいてふてくされている。

「畜生。面倒臭せぇ……。」

「黙れルーク。ったく……これで何度目だ？」

「グルルル…。」

「三十五回目だって。」

シスカが代弁。ガイアは呆れ果て、ため息すら出せなかった。

「あとはお前等だけにした……。ルーク、行ってこい！！」

「あぃあぃ……。……ん？」

ルークの皮を引っ張り、エールは表情で寂しいと訴えた。シスカが近寄り、一緒に待っててあげようか。と微笑む。

「グルルル……。」

「……わかった。エール待つ。」

惜しむように手放し、ルークを見送るエール。ルークの姿が消えると、赤ん坊のようにグズり出す。大きな腕でエールを包み込み、

イヴィルは懸命に慰めた。
ルークが毎回脱走するのは、実はエールのため。エールは人見知りが激しく、かつ臆病で寂しがり。ルークがいないと、不安に押し潰されそうになるのだ。

「ルーク……。ルークぅ……。」

「大丈夫。シスカと自分ガイルかラ。一人ジゃナいヨ？」
研究所の中、ルークは双子の弟のことをずっと考えていた。ラルク博士の面談には正直に答えている。

「うわー、直すの大変だなぁ……。相変わらず、エールくんの為に無茶苦茶やってるね。なんで、不適合者のエールくんをデッドバスターにしろなんて言ったの？」

「色々あンだよ。アイツは、俺がいなきゃいけないんだ。離ればなれだったら……エールは……。」

「……。よし、直すよ？今回はかなりの激痛になるから、覚悟してね。」

コンセントに似たプラグと、注射針が付いたコードを取り出してルークの腕に。それが終わると、ラルク博士はコンピュータに向かう。修正プログラムを起動させた。

「二時間はかかるからね？」

「了解……。……うッ！！アァァァァァッ！！」

ゾロアークのカルマが受けたものより強い痛み。必死に耐えるルークだが、我慢できず悲鳴を上げていた。
この様子を見つめながら、ガイア黒王は過去の回想をしていた。それは、まだデッドバスターが生まれる前の……。ディアルガとレシラムに出会うまでの記憶。

-Ｔｏ　ｂｅ　Ｎｅｘｔ-

?：始マリノ刻（後書き）

時の神、ディアルガ。

白き混沌、レシラム。

彼等が世界の危機に気づいていなかったら……。今頃、我々は終わっていただろう。

?：全ての原点

――回想

千年以上も昔、悪魔は突然現れた。強いポケモンを本能的に探し当て、片っ端から食い荒らす。
惨劇は止むこと無く、悪魔を恐れたポケモン達は、地下都市を築き上げ地底で暮らし始める。以来、外へ出たことが無かった。デッドバスターが生まれるまでは。

――数年前

地下都市で暮らし始め、千年が経つ……。
悪魔に怯える暮らしを続けているポケモン達……。恐怖からのストレスに耐えきれずバタバタと死んでいった。これを聞き、世界各国の代表ポケモンが中央広場に集い始める。緊急集会が行われた。

南地区代表：リザードン
北地区代表：エンペルト
西地区代表：ドレディア
東地区代表二名：ドサイドンとケンホロウ（♂）
悪魔と戦った経験者：ダークライとミュウツー

部下に見守られながら、代表達は悩み苦しんだ。どうすればいい……と。

「セルフィオ王、ミュウツーの貴方が勝てなかったと父上から聞いています。誠でしょうか？」

リザードンが、ミュウツーに恐る恐る聞いてみる。ミュウツーは目を瞑り、静かに頷いた。

「申し訳ない……。ダークライと手を組んでいても尚、勝気は無かった。あれから千年か……。このままでは、悪魔は地下都市にくるであろうな。」

これを聞き、部下達が騒然とする。ドレディアは二人に向けて叫ぶ。

「二大勢力と恐れられた、最強の闇と言われしお二人が勝てなかったのですか？！」

今度はダークライが言う。

「嗚呼。この通り痛手を負ってきたよ。」

ダークライの右腕には包帯。肘まで続く包帯を外すと、木製の義手が姿を現した。銀のネジで固定されていて、痛々しく見える。

身を震わせ、ドサイドンは「無理だ」と呟く。この言葉に怒り、リザードンが拳を作ってドサイドンに殴りかかろうとする。

「テメェーッ！！」

「待て、ガジェット。」

「！……イブキ。」

リザードンを止めたエンペルトは、冷静にこう切り出す。

「神に頼る他ないな……。」

また、辺りが騒然とする。存在がわからないモノにすがる気か？！と、ドサイドンは怒鳴った。

「いるだろう？」

「神話になッ！！実在しない存在に追いすがるより、我々でなんとかするのが正しいはずだッ！！それともイブキ……。貴様、神を見たことがあるのか？」

全ての視線がエンペルトに向けられる。表情一つ変えず、「夢に見た」と一言。ドサイドンは何も言わなかった。

この世界で、世界創造の神として語り継がれているポケモンは、二十以上存在する。一口に神といっても、民と共に世界を見守る……いわば管理人のようなものがほとんど。彼等は【神の代行】と呼ばれている。
実在がはっきりと確認されていない特別な存在……。それが、彼等がいう【神】だ。エンペルトは、その中の一人に出会ったという。

「神話では確か、強き思いを抱く者にのみ姿を現すとあったな。夢

と言う形ではな……。信じられんな。」

「フン……。これだからドサイドンは嫌いだ。頭が堅い。」

「なんだと?!」

「喧しいぞ。」

ダークライに止められ、ドサイドンは静かになった。足元を見て、不服な表情をしている。

「今は作戦会議中だ。喧嘩や関係の無い会話は控えるんだ。……で?イブキ、その神は?」

「時を司りし者……ディアルガ。」

「……。それはまた、大層なお相手だな。話しを戻すぞ?議題は、悪魔討伐の作戦。エンペルト、イブキの提案はディアルガに頼むと……。だが、どうやってだ?」

「騙されたと思って、時の帳に行くというのは？」

エンペルト、イブキはそう提案するが……。場所がわからない。皆はまた悩み苦しむ。そんな中、何処からか声が。

「これを使うのはどうかな？」

「「？！」」

「何奴ッ！！」

「そう警戒するな、ミュウツーの王。余だ。デスカーンのオズだよ。」

時計台へ視線が集まる。楽しげな表情で、デスカーンが鉄のタルを持ってこちらを見つめている。彼の頭の上に、ランクルスというポケモンがしがみついていた。

「降りて来たらどうだ？」

ダークライが言う。ゆっくりとこちらに向かって降りるデスカーン、オズ。

場所を開けてやり、一同デスカーンの言い分を聞いてみることに。

「よいしょ。」

――ゴトン

「久しいな。諸君。」

「挨拶はいい……。オズ、それはなんなんだ？」

半場呆れているダークライ。腕を組んでタルを見つめる。真剣な表情に変わり、オズはためらい無く回答。中には、悪魔の血液が入っていると告げた。ダークライとミュウツーを除いて、一同は大パニック。

「そッ！！そそそそんな物騒なモン何に使うんだよ？！」

「そうよ！！」

「詳しく聞かせてもらおうか？」

リザードンとドレディアの話しを押し退け、ミュウツーは言う。ニヤリと笑うその笑みは、悪役のよう。

「おぉ恐い。……さて。余が言いたいのは、彼が説明してくれるぞ。ランクルスのラルク博士だ。」

オズの頭から降り、タルの上に立つランクルス。場違いの明るい雰囲気の彼は、王達の前に関わらずほぼため口。緊張もせずスラスラ会話をしていく。

「オズ陛下に悪魔の研究を頼まれましてね？殿下と外界に出て、コチラを採取したのさ♪悪魔はポケモンを食べて成長する生き物で、その強さは無限に上がり続ける。つまり、化物ってことだね。悪魔にもタイプがあって、攻撃，防御，スピードの三つがある。ポケモンみたいに複数持ってたりってのは無いけど、こっちに帰るの苦労

したよ？そんな化物に対抗するには……？逆に我々ポケモンも、悪魔の力を付けるしかない！！ということで、策を考えました。」

「目には目を、歯には歯を……。というだろう？余はもう試した。セルフィオ帝王、最大でバリアを張ってくれないか？余が成果を発表しよう。」

「何？最強のこの私を、越えているとでも？まぁいいだろう……。」

嘲笑い、ミュウツーは言われた通りにした。王や部下達は後ろを避け、彼等の左右に着いた。

深呼吸し、オズは集中力を高める。構えて、影の手全てをミュウツーに向ける。余裕の表情をするミュウツーだが、オズは勝てると確信していた。

赤黒い炎を手に纏い、手を全て中央へ。ポケモン技では無い、炎の光線を発射した。

刹那、ミュウツーの顔色が変わった。背筋に冷たいモノが走り、完璧な防御姿勢を取ろうとするが。もう遅い。

――ドオォォォン！！

「「ヴィヴァーチェ王ッ！！」」

ミュウツーの部下達が走る。煙が晴れると、壁に叩きつけられ瀕死寸前のミュウツーが……。

「ぐ……うぅ……。」

「この通り、パワーは悪魔そのものだ。」

「なるほど…な。フフフ…。良い成果だ。オズ。」

「ズタボロの貴方を見るとは思わなかったのだ。」

ニヤニヤ笑いながら、オズはオレンの実を投げ渡した。

収穫はそれだけでは無い。オズは一同に向けて言う。「今度はなんだ？」とダークライ。腕を組んで気だるそうな目をしている。

「時の帳が光っていた。」

「「えぇ？！」」

「お前見つけたのか？！」

「かっかっかっか！地上に残されてしまったポケモン達が、悪魔に食われる様を天界からしっかり見ていたみたいだぞ？神々は、やっと味方に着いたのだよ。……千年待った。千年もッ！！余の叔父上が言っていた奇跡が、今ッ！！起きたのだ！！」

「ん〝ん〝。興奮してるところ悪いが、悪魔化するにはどうすればいいんだ？」

咳払いの後で、ダークライはオズに聞いた。

「簡単だ。悪魔の血液を飲めばいい。ただしな、身体に馴染むまでかかるぞ？余は一ヶ月くらいだったかな？」

「無事に時の帳に辿り着くには、悪魔化するしか！！」

「だな！！」

「では、開けますね。」

ラルク博士は、バルブをひねってタルの蓋を開ける。蓋はゆっくりと持ち上げられ、中から大量の鮮血が現れた。石のコップに鮮血を汲み、オズは王達に手渡す。意見一致したものの、王達は抵抗の表情を浮かべている。その中で二人、ためらわず飲み干したポケモンが……。

「ガイア黒王、セルフィオ帝王……。決意が早いお二人じゃな。」

「フン……。このセルフィオが遅れを取るものか。悪魔からポケモン達を守る……。王として当然のことよ。」

この言葉を聞き、王達は次々と鮮血を飲み干していく。噎せかえる他の王達をよそに、ガイアはセルフィオを横目で見つめ言った。

「元・恐怖政治をした独裁者が、何を言うかと思えばそれか。」

「なんだと?」

「言ったままの……う〝ぅッ！！」

胸を押さえ、ガイアは崩れ落ちた。ミュウツー、セルフィオに抱えられたガイアの体は、四十度を超える熱を出していた。熱と激痛に耐えるどころか、ガイアは気を失ってしまった。呼吸はしている。

「ガイア……！！ガイアッ！！」

「セルフィオ帝王、大丈夫。しかし何故だ？ガイア殿だけが余と同じ症状を……。博士、調べてくれんかな？」

ガイアはオズの宮殿に運ばれ、完全に悪魔化するまでオズに見守られた。その間王達は、ラルク博士の研究所で血液検査を受けることに。すると、不適合だったと告げられる。

「なんだと？！」

「セルフィオ帝王、そう怒鳴らないでくださいな！えっとねぇ……。

どうやら、全員が必ず悪魔化する訳じゃないみたいなんです。お気を悪くさせるようですが、技と特性が全て無くなっていました。」

頼みの悪魔化は出来ず、王達は落胆。二人だけに任せるしかないのかと、ケンホロウは嘆く。

「私は諦めんぞ…！！」

セルフィオは研究所を去ろうと扉へ向かう。ラルク博士に止められ、立ち止まった。

「セルフィオ帝王！いくらミュウツーの化学力でも、こればっかりは無理ですよ！！」

「ガイアは私に教えてくれたのだ……。本当の幸せを、本当の生き方をッ！！あいつだけに良い格好はさせないッ！！」

言って、セルフィオはいなくなった。

「やれやれ。仲が良いのか悪いのか……。」

ケンホロウは苦笑いで扉を見つめる。

「ライバルってやつですわね？……あの、これを利用すれば、悪魔を倒す戦士を作れるのではないでしょうか。」

ドレディアの提案。それは良い判断だと、ケンホロウは賛成。

「各地に、悪魔を倒そうと意気込んでいる集団がいるんだ！！彼等に頼めば、私達の代わりに戦ってくれるはずだッ！！」

「けど、適合者が出るのは奇跡でしかないぞ？オズ陛下とガイア黒王はたまたま当たっただけさ。」

ラルク博士は乗り気じゃない様子。王達を止めはしなかったが、結果はこの通り。

千、二千……。男女問わず、王の呼びかけで自ら現れたのはこれだけ。本当ならもっといるはずなのだが……。

「……どうだ？イブキ、ガジェット。」

「……いたッ！！が……少なすぎる。」

これだけ集まってたった四人しか適合者が出なかった。しかも子ども。

混乱するポケモン達を宥めようと、必死に呼びかける。しかし、野次や罵声が治まることはない。そんな時……あの声が。

――咎めてはいけません。

静まりかえるポケモン達。天井を見上げ、無意識に声の主を探している。

――彼等は、私に従って動いただけ……。今苦しんでいる子ども達は、神に選ばれし勇者。今は、試練を受けているところ……。

「貴方は誰だ！！名を聞かせて下さいッ！！」

エンペルトが、声の主に向けて叫ぶ。優しい温もりを持つその声は、ポケモン達に衝撃を与える。

――私は、白き混沌……。真実の大いなる龍、レシラム。

「レシラム……！！」

――二人の王と、その子達を時の帳へ向かわせるのです。私は、そこでディアルガと待っています。

声が消え、子ども達は親に決意を伝えていた。

「ボク、神に選ばれたんだね。パパやママを守るから、心配しないでね。」

「父ちゃん、俺、もう甘ったれたりしないから…！！だから、だから……！！」

「わかった！もう何も言うな……！！頑張れ！！」

空気の変わりように、不適合者だった王達は唖然としている。神の登場で、こんなにも変わるものなのだろうか。いや、神だからこその効果なのか……。

「待たせたな。」

「……セルフィオ帝王。やっぱり駄目でしたのね。」

赤い目、黄色く鋭い瞳。悪魔の目をしたミュウツー、セルフィオ帝王が姿を現した。無理矢理悪魔化することに成功したように見えるが、失敗したのだ。残念そうなオーラを纏っている。何故か首に赤いスカーフを巻いていた。

「目が変わっただけで、何も変わっちゃいない。ただな、良いモノを開発した。」

「良いモノ？」

「嗚呼。試作品はガイアに使ってもらう予定だ。無論、私も使うぞ？」

笑い、スカーフをめくりあるモノを見せる。ひし形の、黄緑色した石だった。実はこれ、後の寄生兵器になる原型。ラルク博士とセルフィオ帝王が協力し、改良に改良を重ねて寄生兵器が誕生した。

――一ヶ月後

ダークライ、ガイア黒王の右腕に変化があった。五本指の、悪魔の腕になっていたのだ。皮膚は濃紺で、赤く鋭い爪が恐怖を呼び覚ます。最初に紹介したズルズキン、イヴィルとは違って長さは変わってない様子。

「これは……！！」

「悪魔化、できたぞ。」

中央広場には、あの王達と適合者の子ども達。そして、ガイア黒王とオズ陛下の姿がある。いよいよ、悪魔のいる外界へ行くのだ。

「時の帳があるのは、かつて火の国があったアルランダ地方だな……。セルフィオ、サポーターは任せたからな?!」

「最小限の超能力しか使えなくなったが、力になろうぞ。っと、その前にガイア……。これを。」

「ん?」

あのひし形の石を投げ渡し、セルフィオ帝王は何処かに埋め込むように指示。

「試作品の兵器だ。使ってくれ。」

「実験は？」

「私もするから安心しろ。ほら。」

「……そういうことか。」

悪魔の手の甲を切り裂き、傷口に石を無理矢理押し込むガイア。激痛が襲いかかったのは、言うまでもない。血に染まった右手の傷口は直ぐ塞がり、石と皮膚が一体化した。

「ハァ……。ハァ……。」

「スゲー。」

黒銀のゾロアが小声で言った。立ち上がり、ガイアは全員に向けてこう言った。まだ苦しそうに息を荒げている。

「此処までトントン拍子に進んで来たが、もうこんな奇跡は無いぞ？！ここから先は、何が起きるか予測不可能だッ！！今日より我々

は、悪魔から世界を守る使徒……デッドバスターとして生きることになる！！後戻りは出来ない！！進むのだッ！！」

「「オォーーッ！！」」

「我に続けッ！！選ばれし勇者達よッ！！」

――現在

そして、無事に時の帳に辿り着き……。ディアルガとレシラムに出会う。
彼等の住む天界も、悪魔に侵略を受けたらしい。創造者にして母である、アルセウス。そして、兄弟である他の神々がマザーコアに連れ去られてしまった。逃げ延びたディアルガとレシラムは、長い年月をかけて下界へ降り、彼等を導いたのだ。

――いくら万能の神でも、悪魔には敵わなかった。そんな相手に、我々デッドバスターは戦いを挑んでいるのだな。

メンテナンスが終わり、ぐったりしているルークを見つめながら、ガイアは心中で呟く。

――ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン……

「エールだな。」

苦笑いし、ガイアは扉を開ける。オレンジの十字架が模された白い盾を持ち、エールは盾で扉を叩いていた。暴走しないようにと、イヴィルがエールのパーカーを掴んでいる。

「ルークは?!」

「大丈夫。いるよ。今プラグを外すから、待っててくれ。」

ガイアの言葉を聞き、エールは笑顔になる。

ヨタついて立ち上がるルーク。急いでエールの元へ向かい、抱きし

めた。イヴィルは、パーカーから手を離す。

「心配かけたな。エール。」

「ルーク！」

頬ずりするエールを見つめ、ガイアはまた過去を思い出す。

――回想

「よくぞ、此処まで来てくれた。」

「待ってましたよ。皆さん。」

巨大な蒼龍（そうりゅう）と白龍。ディアルガとレシラムだ。

「エンペルトから聞いたである。あの時はフォローしてくれて助かったのだ。余が代わりにお礼を言うである。」

「いえいえ。実は、我々も悪魔の襲撃を受けて……。何とか逃げ延びて来たところなの。」

「「えぇ？！」」

「悪魔の血を使った技術は、もう会得しているな？私とレシラムの力で、血に適合したポケモンを探し出す手伝いがしたい。あと、小さな力だが加護を……。加護を受ければ、ある程度力がますはずだ。悪魔が下界にいるせいで、我々にとって有毒な瘴気が世界に充満している。余り外へは出られないから、これくらいしか協力できない。」

ディアルガが言うには、悪魔の血を飲んでいれば適合者でも不適合者でも外界で活動可能らしい。普通のポケモンだと、瘴気にやられてすぐ疲れてしまうようだ。そして、神にとっては有毒ガス。

「連れ去られてしまった、ゼクロムお兄様やパルキア兄様が心配だ

わ。お母様も、無事かどうか……。死んでしまっていたら、どうすれば……！！」

レシラムはうつ向き、涙を流す。ニカッと笑ったオズは、レシラムに言う。

「余と仲間達で、必ずアルセウス様達を助け出すのだ！だから、泣かないで欲しいのだ。」

「ありがとう。私達も、できるだけ協力しますわ。さぁ、今日はもうお開きにしましょう。そろそろ日が沈みます。悪魔が活発に動く前に！」

頷き、神々を背に走り去る。そんな時……。

「ストップ！」

ガイアは一同を止めた。茂みに何かいると言い、掻き分けて行く。すると奥から、衰弱しているズルズキンが四人現れた。不思議なこ

とに、内一人は悪魔化している。三人を守るように腕を伸ばしていた。

「……まだ、外界で生き延びている奴等がいたのか。」

……そう。この四人こそが、ズルズキン四人組。ルーク、エール、シスカ、イヴィルなのだ。
次回、ついに物語が始まる！！

-To be Next-

?：全ての原点（後書き）

―基地アナウンス―

南地区：アスナロ地方

エリア三十から救難信号

悪魔出現の報告有り

デッドバスター出動して下さい

？：死と恐怖の楽園　アスナロ地方（前書き）

アンダーワールドの壁に空く、巨大な大穴。そこには、ドリュウズとダグトリオがいる。これは、修羅の門というゲート。デッドバスター基地の近くにしかない、外界への入り口だ。
ドリュウズは、ガイアの連れているデッドバスターが気になり言った。

「黒王様、四人組の片割れは？」

「置いていく。」

服にフードに鬣に……。ダークライのガイアは、ズルズキン三人をダークホールで眠らせて、強引に連れて来たようだ。

ということは……。

Ｎｅｘｔ　本編↓

？：死と恐怖の楽園　アスナロ地方

デッドバスター基地。西地区にだけ存在する、第五ブースにある赤煉瓦の館がそこだ。十七番目の国、龍の国の王カイリューが統治するブースでもある。

「ルークー！」

庭を走り回っているズルズキン、エール。とても寂しそうな表情で、子犬のようにガタガタ怯えていた。寄生兵器の盾を出してとにかく走っている。他のポケモン達は、ルークの所へ連れて行ってあげたくても手出しできない。彼は今、任務に出ているからだ。

「やれやれ……。お兄ちゃん中毒の片割れくんが暴走してるぜ。」

「離れての任務は、初めてらしいからな。無理もない。」

造木の上でエールを見つめる、ゾロアークのカルマ。その仲間のルカリオ、リオン。腕のトゲが一つ多い様子。

「カルマ？」

「ちょっくら、宥めるわ。」

木から降り、カルマはルークに化ける。悪魔化しても、化ける力は健在のようだ。

「エール！！」

「！！……ルーク。ルークー♪」

カルマと知らず、エールは走り来る。思いきり抱きしめられ、頬すりされ、カルマはちょっと嫌そう。けど、二人にとっては日常茶飯事。頑張ってルークを演じることに。

「ルーク、ルークー♪」

「よしよし……。もう大丈夫。此処にいるよ。」

――ルーク、早く任務終わらせてこいッ！！正直キツイぜ……。

――外界

アスナロ地方：エリア三十。かつて、火の国があった場所だ。今では死と恐怖の楽園と言うべき惨状。現在位置は、城下町だった場所だ。家は崩壊し、白骨死体があちこちに転がっている。赤紫色の煙が立ち込めていた。

「瘴気……。こんなにも充満している場所は初めてだ。」

ガイアは右腕を掴み、何かに耐えている。今回の任務に参加したデッドバスターは、この五人。
キュウコンのミア、リグレーのアルト。
そしてズルズキン三人。ルーク、シスカ、イヴィルだ。本当はエールと四人一組のチームのはずなのだが……。エールは足で惑いと、ガイアは三人だけ連れて来たのだ。

「グオォォォ！！！」

「黒王を怒鳴っても仕方ないよ。イヴィル。」

「グルルルル。」

「わかってる。ルークだって、エールのことが頭から離れて無いだろうさ。さっきから上の空だろう？」

シスカとイヴィルは、団体から外れているルークを見つめる。寄生兵器の巨大ガトリングガンを右腕に纏い、ルークは灰色の空を見つめていた。

「エール……。」

任務に集中できる状態では無いのは確か。イヴィルは、見向きもされず放置状態のルークの元へ。

「ルーク、エールが心配カ。自分モ心配だ。きっと今頃、怯えテルだロうに……。」

「今まで、ずっと一緒にいたからな。なんか、こういう任務はやりずらい。心に穴が空いたような……寂しい感じがする。」

「ソウカ。とリあえず、任務に集中ショう。急イで終わらセて、エールに逢いに行クンダ。」

元気付けようとしていると察し、「そうだな」と言って微笑む。笑顔のルークを見て、イヴィルも笑った。二人は団体に戻り、ガイアの話しを聞く。

「今回の任務は、ランドロスを保護することだ。報告書によれば、大地の創造者代行の彼の祠が、悪魔に荒らされたらしい。祠が壊れてしまい、外へ逃げられず閉じ込められてしまった……。ミッションは、祠の修復とラドロネスの保護だ！まずは、エリア三十の集落へ向かう。いいな？！」

「「はい！！」」

「グオォッ！！」

「ん？イヴィルが返事をするだなんて、珍しいな。」

「グルルル……。」

気合い十分。イヴィルは早速作業に取りかかる。その作業は、匂いをかぎ分けること。ルークのチームではいつものことだが、ミア達は何事かときょとんとしている。

「黒王様、これは……。」

「集落から狼煙が上がっているはずだから、煙の匂いを辿って行くのだ。その方が早い。

イヴィルは唯一、完全な悪魔化を可能にした適合者だ。全てが悪魔そのもの。まぁ、本人はあぁだから……未だにポケモンと思ってないみたいだけど。」

包帯をほどき、ガイアは腕を露にする。五本指の、悪魔の腕を。

「？！」

体を強張らせ、イヴィルは辺りを見渡す。様子がおかしいと、ルークはイヴィルの元へ向かった。

「どうした？！」

「仲間……。仲間クル。悪魔ガ来る。裏切リ者って、怒ってル。」

「イヴィルお前…！！」

「武器を構えサセてッ！！来るよ？！」

濃い瘴気の影響で、イヴィルの思考が少しずれているようだ。悪魔とポケモンが、混ざってしまっている。
臨戦体制を整え、悪魔出現に備える一同。辺りを見渡して警戒し、何が起きてもいいように武器を取る。

「ん？黒王様、武器は使わないのですか？」

「いらぬ。」

一方ガイアは、滅多に武器を出さない。普段は、悪魔の腕を使い戦うらしい。
リグレー、アルトの寄生兵器はドーナツ状の刃物。中にすっぽり入っている。
キュウコンのミアは、防御力を上げる羽衣。悪魔の力が加わった技で戦うため、これにしたのだ。

「フフフ……。久しぶりに腕が鳴るね。」

まだ寄生兵器を出していないシスカは、左胸に手を当てる。黄緑色に光輝く胸から手を離すと、粒子が手元に集まってきた。粒子は形になり、武器となる。シスカの寄生兵器は、小太刀。一人だけなんとも頼りない武器だった。

はりつめた空気を、ライオンの声に似た咆哮がつんざく。人間の赤子の泣き声に似た咆哮もある。これら全て、悪魔の鳴き声。目を瞑り、ガイアは右腕を前に突き出した。

「……。来たッ！！」

目を開き、真っ正面に突進。デッドバスター達はガイアを追う。

一同の前には、牛の頭を持つ巨人。下半身が虎だった。他に、頭がカラスの猿がいる。皆、濃紺の体に赤い目を持ち、鋭い爪がある。

「向こうは任せたッ！！」

「行くよ！アルトッ！！」

「了解！！」

走り去る三人を見送り、ズルズキン三人は悪魔と対峙。

「ギァァァッ！！」

「悪いな……。どうヤら、悪魔ジャナクてポケモンみたイナんだ。何回言えばイインダよ？」

巨人に向かって走るイヴィル。地面に向かって殴りかかる巨人の攻撃を避け、イヴィルは爪を使った切り裂き攻撃で猛攻。前足を一つ切り刻んだ。態勢を崩し、巨人は悲鳴を上げながら前へ倒れる。

――ズゥゥゥン……

「……消えなッ！！」

ルークは巨人の頭に登り、ガトリングガンの銃口を巨人の頭に押し当てる。頭の原型が無くなるまで乱射しまくった。気がつけば、ルークは血まみれに。

「おっと。」

テッカニンより早いスピードで、ルークは背後にいた猿の悪魔か

ら逃げる。

近くの岩山に立ち、背後にいた悪魔を倒す。終わると、倒した悪魔を見つめ直した。乱射したことで、脳やら血やらがグシャグシャで露出している。

「エグいことシタナ。」

「いつものことさ。……あれ?!シスカは!」

一方シスカは、猿の悪魔と戦っている。素早く、身軽な悪魔に大苦戦。思うように接近戦ができない。

「あぁッ!!」

嘴で右肩を貫かれ、小太刀を落とす。嘴を無理矢理開き、肉を引き千切ろうと試みる猿の悪魔。手で固定されて身動きが取れず、シスカは激痛で気を失いかけていた。

「この馬鹿ッ！！」

駆けつけたルークにより、猿の悪魔はシスカから引き剥がされる。

「ナニ自由行動してんだッ！！もう少しで死ぬとこだったんだぞ？！」

「いいじゃん……別に。」

「ったくッ！！目に届く場所にいて良かったぜ。イヴィル、みんなと合流するぞ！」

残りの悪魔はルークが倒し、シスカを抱えガイア達の元へ。こちらもバトルを終えたばかりの様子。ガイアが一番血にまみれていた。純白の頭の毛に、赤い模様が。右腕が真っ赤で、爪から血が滴り落ちている。

「派手派手にやりましたな。」

「これくらい働け。お前等は三位一体だから、退治する量が少なすぎるだろ？！」

「ガルルル。」

「うんうん。」

「なんだ？」

「無茶すんの一人いるんだよ。」

目でシスカを指すルーク。抱かれている彼を見て、ガイアはため息を漏らした。

「またか、シスカ……。」

「えへへ。」　ふと、ルークの脳裏にエールの面影が浮かんだ。浮かない表情で、エールを一人にしては置けない。今から戻って連れてこれないか？と、ガイアに相談。

「駄目だ。」

「頼むッ！！エールは一人じゃ駄目なんだよ！！」

「不適合者が最前線に出るのは危険だと、何回警告した？！大切な存在なら、危険に晒すんじゃないッ！！」

ガイアの怒鳴りに怒りを燃やすイヴィル、犬のように唸っていた。ルーク達を守ろうとしているだけだから、ガイアは特に咎めはしない。

「イヴィル。」

「……。」

ルークに言われ、渋々唸るのを止める。

「任務に集中できないのなら……アンダーワールドへ帰れ。少し頭を冷やすんだな。」

ガイアは再び歩き出す。アルトとミアは、ルークを一瞬だけ見て

ガイアを追う。

「グオォォォッ！！」

「イヴィル。」

「！」

「怒らなくていい。……ちょっと別行動しようぜ？そこらへんブラブラ～っとよ。」

――何処かのダンジョン

シスカの傷はもう治ったようだ。三人で歩き回り、アンダーワールドへの入り口を探すことに。今いるダンジョンは、腐敗臭が立ち込める水辺。清らかな清水が流れていた川は、今は毒の水が流れる死の川。バスラオやコイキングの白骨死体が浮いていた。

「酷い……。」

・・・

「これが、母さんガシタカったこト？」

「だろうな……。」

ルーク達四人組は、実は義兄弟。ルークとエールは本当の兄弟だが、二人は違う。母さん……とはどういうことか。四人組結成の謎については、またいずれ。

回想しながら、ルークはガイアへの思いを話す。

「あの人が、ポケモンという種族を教えてくれなかったら……俺達は悪魔のままだった。言葉だって、ガイアさんが教えてくれた。」

「自分は覚えラレなカッタけれどネ。」

「ガイアさんに恩を返したいけど、あれじゃあね……。……見てよ。木々が枯れ果ててる。毒の水を吸ってるから、色が黒紫に変わっちゃってるよ。」

水も、大地も、それを支える木々すら息絶えている。今の外界は死んでいるに等しい。改めて、悪魔の恐ろしさを噛みしめる三人。いつだって一緒。それが四人のモットーだから、一人かけるのは筋が通らない。早く帰ってエールに会おう。三人はそう思っていた。

「ルークー！！」

「「？！」」

「エール？！」

カルマとエールがやって来た。ルークはエールに駆け寄り、思いきり抱きしめる。

「ごめんなエール。寂しかったろう？」

「いやはや参ったよ。エンペルトのイブキ様に見つかってさ……。お前の変わりをしてやってたんだ。」

「え？カルマが、俺の？」

「嗚呼。で、任務でエリア三十に行くってなったから送り届けてやろうと思って。……あれ？」

辺りを見渡し、三人だけになっているのを知る。あたふたしながら、カルマは三人に訳を聞いた。

「はぐれたってゆーか、見放された？帰って頭を冷やせってさ。」

「マジかよ……。だったら、手伝ってくれよ！みんなバラバラのエリアにいるんだ。な？！頼むッ！！後で嘘（ペテン）でガイア黒王騙してやるからさ！！」

手を合わせてせがむカルマ。四人は顔を見合わせて、どうするか考える。

「「わかった。」」

「ガルルル。」

「やった！ありがとうよ！！友人はいいねぇ♪」

「グルルル。」

いつ友達になったんだ？と、イヴィルは言う。

「言葉わからないけど、まぁ、カタイこと気にすんなよ！な？……因みに、俺が受けた任務だがな。ボルトロスの護衛だ。悪魔と戦って負傷し、なんとかアスナロ火山にある【聖なる木】まで逃げきったらしい。」

「聖なる木？」

……聖なる木。それは、アルセウスの木とも言われている光色の神木のこと。世界各地にあり、悪魔はこの木の光を苦手としている。それゆえ、現在は避難所とされている。本当の存在意味は、誰も知らない。

アスナロ火山は、この道をまっすぐ歩いた先にある。ボルトロスを追って来た悪魔で溢れているのは、予測として念頭におかねばならない。バトルは避けられないのは確実だ。

拳と拳をぶつけ、カルマは気合いを入れ直した。シスカの時のように寄生兵器を出して、装備を整える。クリスタルの美しい鎌を手に

した。鎌は、死神の鎌がモチーフだという。

「うんちくはいいから、早くしようぜ？」

「連れないなぁ。ま、いいか。」

カルマが先頭に立ち、アスナロ火山に向けて出発。枯れ草を踏み鳴らして歩く。途中カルマは、使えそうな石ころを拾い集めてアイテムにする。その姿を見たルークは、顔をしかめて言った。

「武器にならねぇだろ？何に使うんだ？」

「悪魔は知能が低い。だから、お取りに使うのさ。イヴィルはよく引っかかってくれてるよ。」

「ガルル？」

クスクス笑うカルマを見つめ、イヴィルは首を傾げる。

「よし、薬草でも探しながら行こうか。」

――アスナロ火山入り口

赤い岩山。本来あるはずの煙が、上から出ていない。代わりに、僅な輝きが見える。聖なる木の光だろうか。
火山の煙突から地面に目をやると、やはり悪魔はいた。あの巨人と、猿の悪魔だ。物陰に隠れ、悪魔の動きを観察。タイプを見極めるのだ。

「このエリアにはこんな悪魔がいるんだ……。デカイのは、ずぅたいだけでスピードはなさそうだ。小さいのは注意な？スピード系の悪魔だ。」

「良くわかるな。」

「長年の勘だよ。さ、急いでボルトロスを助け出そう！聖なる木は、ダンジョンの最上階にある！」

五人は物陰から出て、入り口付近にいる悪魔を一層。猿の悪魔はイヴィルとカルマで、巨人の悪魔はルークとシスカで倒した。エー

ルは、盾で血を浴びないようにしてルークを追う。

「うわ！！」

「カルマッ！！」

猿の悪魔に取り押さえられ、カルマは今にも殺されそうだ。ルークがガトリングガンを乱射して助けたから、もう大丈夫。

「危なかった～……。サンキュー！」

「世話がやける化け狐だな。」

「そりゃどーも。」

内部に入り、火山の活動が停止していることを知る。かつては、入って直ぐにマグマの湖が出迎えていた。マグマの姿は無く、湖だった場所が大穴になっていた。顔をしかめ、カルマは壁に拳をぶつける。

「天界の神々がいないからだ。世界の理が、本格的に乱れ始めている！火山が止まれば、大地が荒れてしまう……！！マザーコアを探し出して、アルセウスと神々を助けたいが……ッ！！」

「場所がわからないんだよねぇ。これ以上荒れてしまったら、集落にいるポケモン達が困るよね？……ここには、悪魔はいないみたいだ。」

冷静に構えるシスカ。前へ足を出した瞬間、地面からミイラ人間が現れる。おぞましいその姿に、エールはすっかり怯えてしまった。

「大丈夫。守るよ。」

「ルーク……。」

「コイツ等も悪魔か？！こちとら急いでんのにッ！！」

鎌を持ち直し、カルマはフロアで乱舞する。攻撃系の悪魔だから、防御は手薄だった。
負けじとルークもガトリングガンを乱射。イヴィルとシスカも手当たり次第倒して行く。

「終わったか？……痛ッ！！」

「グルル。」

「っあー！かすり傷ッ！！いつ付けたんだ？久しぶりにノーダメージが良かったのに……。」

イヴィルは、カルマの様子を見てきょとんとしている。戦いを楽しんでいるのではないか？と思っているようだ。

――エリア三十の集落

「なんだって？！」

集落についたガイアは、アンダーワールドの基地と通信中。携帯電話型の小型通信機を使っている。
エールが消え、まだルーク達が戻っていないと聞かされる始末。わしゃわしゃ頭をかきむしり、仕方ないなぁと一言。

「何をしているんだあの馬鹿共ッ！！ミア、アルト！私の代わりにセルフィオ帝王が来てくれる。共にランドロスを保護してくれ！！」

「「はい！」」

指示を終え、通信機を切り、ガイアは急いで上空へ。アスナロ火山を目指した。

「カルマがボルトロス護衛の任務を受けたと言うのだから、おそらく……。あー！！扱いが難しい四兄弟だッ！！」

感情と濃い瘴気に反応しているのか、ガイアの右腕がビクリと動く。悪魔の血が騒いでいるようだ。腕を押さえ、痛みに耐えながら進んだ。

「まったく……世話の妬ける。」

-Ｔｏ　ｂｅ　Ｎｅｘｔ-

？：死と恐怖の楽園　アスナロ地方（後書き）

ボルトロスの様子がおかしい……！！

何があったんだ？！

?：本格化する戦い（前書き）

デスカーン、オズは宮殿の屋根からアンダーワールドを見渡している。そわそわと、浮かない顔をしていた。

――何故だろう……。胸騒ぎがする。気のせいであって欲しいのだ。マザーコアがまだ、本格的に動いてはいないことを祈るばかり。余は今は、それしかできぬ。

Ｎｅｘｔ　本編↓

？：本格化する戦い

悪魔がひきめく、アスナロ火山内部。デッドバスターが今いる場所は、ダンジョンの三階。クマの手足を持つ狼が加わり、ボルトロス捜索は困難なものになってきた。あのミイラ人間は、地面の振動で敵の出現を把握しているらしく、やたら滅多に走り回るのは危険だ。
赤い岩の物陰に隠れ、カルマとズルズキン四人組は力の根っこをかじっていた。此処まで登るのに、大きな負傷をしたようだ。

「あー悔しい！」

「ガルルル……。」

「遊びじゃないんだよってさ。カルマ、君は昔からそうなの？」

シスカに聞かれ、カルマは根っこをかじるのをやめた。一瞬きょとんとし、兄貴の受け売りだと苦笑い。

「明るい兄貴でさ、あの明るさにいつも助けられてたんだ。兄貴みたいにしていれば、きっと上手く行く。そんな気がするんだ。」

「へぇー……。ここに、お兄ちゃん中毒がいるんだけれど？」

ルークの尻尾……の皮をしゃぶってるエールを指差し、シスカは言う。エールの様子を見たカルマは、背にしている岩からずり落ちた。

「おいおい、頼むぜ？」

「むぃ？」

苦笑いが暫く止まらなかった。参った参ったと、カルマは四人組に言う。

「さあて……。一度報告書を見直しますかな？」

ゾロアーク、カルマへの任務。悪魔出現と共に、退治するべくボルトロスが現れました。しかし、痛手を負った彼は逃げるしかなくなり、アスナロ火山最上部にある【聖なる木】まで逃げ延びたよう

です。アスナロ火山へ向かい速やかに彼を保護して下さい。

「なるへそ。」

「ボルトロスは、ゼクロムというポケモンの代行をしていたらしい。世界の乱れにいち早く気づき、退治しようとしたんだろう……。けれど、悪魔の力と寄生兵器がなければかなう相手じゃない。」

「グルルル。」

「え？直感だけど、仲間がいないのは何故だってか？それは……あれだよあれ。」

現在十七人しかいないデッドバスター。二人の神の協力で、また新たな戦士が誕生しつつある。訓練施設から基地に来るまで時間がかかるから、ベテランの戦士は個別で任務に当たる場合があるらしい。

カルマのチームは、ルカリオのリオンとキュウコンのミアと三人で組んでいる。肝心の相棒がいないから、危険が増すけれど、新たな同志が来るまでの辛抱。

「ディアルガとレシラムの協力もあって、一人の活動による危険は少なくなっているけれど……ん？」

「どうした？」

狼の悪魔が、仕切りに匂いをかいでこっちに向かっている。

「まずいッ！！」そう言ってカルマは、わざと見つかりに行って悪魔を退治。

「エール、一回離してな？」

「うん。」

「ありがと。……行くぞ野郎共ッ！！」

ルーク達も続き、悪魔退治を始める。狼の悪魔はスピード系の悪魔。ガトリングガンの弾を容易く避け、ルークに飛び掛かった。

「くッ！！」

ガトリングガンを盾にし、狼からの攻撃をかわす。ガトリングガンの装甲に噛みついていて、振り払おうとしても離れない。

「こんのぉぉぉぉッ！！」

ガトリングガンを壁に叩きつけ、狼の動きを制限。拳を狼の顔面に向けて、気合いを集中させる。赤黒い光を纏った拳を思いきりぶつける。
勢いで装甲まで粉々にしてしまう威力で、狼の頭は粉砕。拳を作ってた腕や頬には、返り血がベットり……。

「手間かけさせやがって。……うわー。また壊しちゃったよ。」

狼の頭を素手で粉砕したイヴィル。ルークの声に反応してやって来た。

「また壊レたノカ？」

「嗚呼。エール、おいで。」

言われ、小動物のように走るエール。ルークの尻尾を抱きしめ、「来た」と一言。くっついてないと気が済まないようだ。

お前等いくつだと、カルマは大笑いして双子ズキンをおちょくる。怒りを押さえ、ルークは言う。

「一応、十九だけど？」

「くー。」

「シングルファザーにしか見えねぇぞ！あはははは！！」

「ブッ殺すぞテメェ……。」

ルークの中で、プッチンと何かが切れた。カルマに銃口を向けて、怒り丸出しで脅す。殺気を感じたカルマは、銃口を見て冷や汗を流した。

「ジョークだよ。ジョーク。やだなーもぅ。はは……ははは。」

苦笑いで軽く交わして、カルマは惨劇の跡を見渡す。すると、今まであった上に続く階段が此処にはなかった。壁を叩いて回っても、隠し扉すら無い。

「どしまひょ。」

「……ねぇ、マグマがあったこの螺旋道……。歩いて行けないかな？」

シスカが小太刀で指し示す、螺旋の道。近づいて見ると、堀が深く、一度入れば上がって来れなさそうだった。悩むカルマを無視して、ルークは溝に飛び込んだ。

「よ！」

「あぁ！！ルーク！エール！」

「……。」

「ちょ、イヴィルまで……。」

三メートル以上ある溝の底から、悩む暇あったら行動しろとルークの声が響き渡る。

結局、カルマは四人組に着いて行く。バラバラに行動すれば、後で指揮官の黒王が五月蝿く言うから仕方なく。

「一応、俺の任務なんだからな？」

「わかってるよ。にしても、何処まで続いてんだ？このまま頂上行けるかな。」

――ガイアｓａｉｄ

アスナロ火山に着いたガイアは、悪魔の死骸を見つめていた。銃口で皮膚が焼けた跡、雑に切り刻んだ死体、粉砕された頭蓋骨……。逃げ回っているポケモンの足跡はエールだと過程し、四人組がカルマと一緒にいるのは間違いないと確信。
通信機を作動させ、ボルトロスの居場所と、ダンジョンにいる悪魔の情報を聞き出すことに。

『黒王様、ご用件はなんでしょうか？』

「火山にいる悪魔について……。ボルトロスの所在も知りたいのだが？」

『はい。ダンジョンには、ベアウルフという中級悪魔が潜んでいます。注意が必要なのは、ミイラと呼ばれる悪魔です。地中からの攻撃が得意らしいので、お気をつけて……。あと、ボルトロスについてなのですが……――。』

「何？！……わかった！」

通信機を切り、ガイアは硬直化。動揺と胸騒ぎが駆け巡り、頂上を見つめたまま暫く動けなかった。

――アスナロ火山頂上

途中から堀が浅くなっていき、一同は上へ上がる。頂上に着くなり、ルークは背伸びをして叫ぶ。

「ついたー！」

「やれやれ。四人組には敵わないな。……ん？あれは！！」

眩しい輝きに気づき、一同はその輝きを見つめる。
聖なる木……。アルセウスの木とも言われている神木。全てが金色の姿は、下界に降り立つ創造神を彷彿させる。見とれているカルマとルーク達。シスカは一人、凛と美しくそびえ立つ聖なる木を見渡す。

「いたよ！」

見つけたのは、青い体をした一本角の鬼。下半身が雲に覆われているポケモンだった。彼が、神の代行ボルトロス。ぐったりと横た

わったまま、ピクリとも動かない。

「「ボルトロス！！」」

聖なる木へ駆け寄るカルマと四人組。気がついたのか、ボルトロスはゆっくりと起き上がる。だらんとした姿勢で、虚ろな瞳で此方を見ている。

「止まれ！」

「え？！」

「様子がおかしい。」

四人組を止め、カルマはボルトロスを見つめる。一体、ボルトロスに何があったのだろうか。

少し前に出て、カルマはボルトロスに向けて語りかける。

「ボルトロス！！デッドバスターのカルマです。助けに来ました！！」

「……デッ……ト。バスター……。」

ボルトロスの様子が一変。怒りと狂気に刈られ、天高く咆哮。それにより、衝撃波が生じ五人を襲う。エールを守ろうと、ルークは自らを盾にした。

「うぅ……ッ！！」

「ルーク！」

「大丈夫。大丈夫だから。」

殺気を背後感じ、ルークはハッとする。ボルトロスの殴り攻撃を右脇腹に受け、壁まで吹き飛ばされる。

「ルークッ！！」

「イヴィル、エールを守るよ！」

「グオォォォッ！！」

寄生兵器を構え、シスカはエールの前に。爪を立てて、イヴィルはボルトロスに向かって走る。

「待てお前等ッ！！ボルトロスは任務ターゲットなんだぞ！あとシスカ、寄生兵器でポケモンは倒せない！技で戦うんだ！！」

カルマに言われ、シスカは寄生兵器をしまう。話しをちゃんと聞いていたのか、イヴィルは“なし崩し”を繰り出してボルトロスを猛攻。効果はイマイチ。

「うおぉぉぉぉぉぉッ！！」

「？！」

ボルトロスは雷を纏い、イヴィルの首に掴み掛かる。宙吊りになったイヴィルは、首を締め上げられて苦しみもがいた。更に電撃を受け、成す統べ無く叫び続ける。

「流石、代行だけあるな……。」

カルマが走る。忍者のようにかがんで進むカルマは、ボルトロスを観察した。

特に異常は無いが、明らかに様子がおかしい。無差別に襲うような真似はしないはずだと、カルマは心中で呟く。
可能性としては、瘴気の影響で理性が一時的に消えたか……。または……。

「……やってみるか。」

ボルトロスの背後に回り込み、“イカサマ”を繰り出した。脳天に踵落としを浴びせ、ボルトロス自身を感電させた。気が緩んだことで、電気が逆流したのだ。

踵落としをくらった衝撃で、イヴィルは手放されている。

「ルーク！生きてるか？！出番だぞ？！」

華麗に着地したカルマ。遠くでヨタついて歩くルークに向かって叫んだ。寄生兵器をしまい、ルークは気合いを二つの拳に集中させる。

「面倒臭せぇ……！！」

刹那。ルークは猛スピードでボルトロスに突っ込む。雄叫びに気づき、振り向いた顔面に気合いパンチを連打。ＰＰ（パワーポイント）を全て使い果たし、締めくくりに闇色の炎を吐き出した。“焼き尽くす”という技に、悪魔の力が加わっているのだ。
ボルトロスは気絶し、後ろへ倒れていった。暫く様子を見ていると、彼の体から黒い気体が。ボルトロスが暴走していたのは、この気体が原因だったようだ。

「なんだ……？！」

動揺する五人の元へ、黒王ガイアが現れる。息を切らして辺りを見渡す。気体を見つめ、直ぐに五人のデッドバスターへ目を向ける。枯れる程大きな声で叫び、ここは危険だと早口で伝えた。

「お前等ッ！！」

「「？！……黒王様！！」」

「あれはまだ我々の手に終える相手じゃないッ！！ボルトロスを連れて逃げるぞッ！！」

「逃げるったって……！！」

気体から、獣の叫びが聞こえてくる。形を変えていき、本来の姿を露にした。

岩の身体、三匹のコブラの尾を持つ巨大な狼。ケルベロス。その禍々しさは、多くのポケモン達を喰い桁外れのパワーを得た証。レベル一〇〇のポケモンが集まっても、勝てる保証は無い。

「く……ッ！！お前等、逃げるぞ？！」

――アンダーワールド

無事帰還し、ルークは直ぐに武器の修理。シスカに抱かれたエールは、やはりジタバタもがいている。

「ルークと一緒！一緒！傍にいるー！！」

「駄目なんだよ。少しだけ待とう？ね。」

一方、研究所。修理が終わり、ルークはぐったりしている。

「はいおしまい。」

「ありがと……ござい……ます。」

自分でプラグを抜き取って、フラフラの状態のままエールの元へ向かった。

ガイア、オズ、ミュウツーのセルフィオは病院施設にいる。保護に成功したのは、ボルトロスのみ。明日改めて、ランドロスの保護へ向かうことになったのだ。その訳は、あの悪魔(ケルベロス)のような上級悪魔の出現。
窓ごしに、寝台で眠るボルトロスを見つめる三人。上下の腕を組み、オズはため息をついた。

「侵略が……。本格的に始まったのだな。神々クラスのステータスを持つ悪魔の登場は、我々への宣戦布告だろう。余を除く王は、各自でデッドバスターを見つけ、育成している。いつも来ているのはエリートのポケモン達だ。ズキン四人組は、例外だがな。」

目を瞑り、ガイアは言う。

「あの日、私はあの四人組を助けた……。悪魔の言葉を喋る四人組に、ポケモンとしての道徳や生き方を教えて来た。しかし、イヴィルは未だに悪魔のまま……。最初から悪魔化していたのは、イヴィルとルーク。この二人は何かあると、レシラムは言っていた。ミュウツーのお前は、初耳のはずだ。」

前回、?のストーリーでは一人だけ悪魔化していると話しましたね?実は、二人だったのです。
保護され、目覚めたルークの目は悪魔の目だった。ガイアはそれに

気づかなかったのだ。眠っていたのだから、仕方ないことですけれどね。

「何故、最初から悪魔化していたのか……。それがわからないんだ。」

「確かに。不可解なことだ。本人達は、なんて？」

「それが……。」

――南地区　第一ブース

ここは、主に格闘タイプのポケモン達が住むブース。無論、他のタイプのポケモン達だっている。
西と南を繋ぐ橋の近くに、ルーク達四人組の住処がある。造木の小さな森の中、人間が六人入れそうな大きなテントがあった。いろんなボロ衣を縫い合わせてできている。

「ルーク、そんなドカ食い止めなよ。体に悪いよ？」

「うるへぇ！！」

任務には成功したが、悪魔から逃げ出したせいで、ルークはかなり不機嫌。傍らで、エールがうさぎのようにチマチマと茸を食べている。よく見ると、生の茸。

干し木の実を片手に、イヴィルは敵について考える。ルークとシスカは、彼の話しに耳を傾け、会話。いつの間にか三人で談義していた。

「あれハ、ルークや自分が戦ってモ勝てナイ相手。あいつの体カラ、強いエネルギーを感ジタんだ。」

「俺もだ。だが、例え強い存在でも突破口は必ずある。ポケモンには、タイプの相性がある。悪魔にだって、何かしら相性があるはずだ。」

「ポケモンを喰い成長するなら、タイプエネルギーを体内に宿してるとか。そんな仮説があるんだけれど……。」

「ナイス、シスカ！それは十分あり得るト思う。となると、鍛エルよネ？やっぱり。」

イヴィルは微笑み、ルークを見つめる。拳を手の平に叩きつけ、「確信はないがやるしかねぇ！！」と、ルークは吠える。

「いっそのこと、悪魔を研究している施設から情報を奪わない？僕も納得いかないんだよ。逃げ出したこと。ケルベロスと名付けられたあの悪魔、四人だけでも倒そうよ。ね？ルーク。」

「いや。いつもならやんちゃするが、今回は誰かの力を借りよう。」

「珍シク偉イな……。」

ルークの言動で、イヴィルとシスカはきょとんとした表情をする。エールは……まだ茸を食べていた。

そんなエールを見て、ルークは頭を撫でてやる。子犬のようにたしなめられているエールだが、嬉しそうだ。

「エールは、俺がちゃんと守るからな？たまに盾で助けてくれよ？明日から、その練習だ。」

「うん！エール頑張る！ルーク達と、悪いのやっつける！」

「いざとなると怯える癖に、こうなると大丈夫なんてね……。」

シスカは思わず苦笑い。さぁ、四人組の無謀な計画がスタートです！

-To be Next-

？：本格化する戦い（後書き）

あの上級悪魔を倒す手掛かり……。

俺達四人だけでも見つけてやるぜッ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5940y/

ポケモンTHEクロニクル

2011年11月27日00時53分発行